

東京家政大学・短大の学生の皆さん

本学は、戦後の民主主義教育導入と共に新たに設立された新制大学の一枚であることをご存知でしたか？ 昭和 24 年（1949 年）4 月から学業がスタートしたのですが、そのときの学長が青木誠四郎先生です。

青木先生は戦前、東京帝国大学（いまの東京大学）を中心に教育心理学を教えておられ、この分野では日本を代表する方でした。

戦争終了後、アメリカから民主主義教育が導入されることとなります。慌てたのが当時の文部省です。日本の教育全体を民主主義に基づいて根本的に変革する大事業を誰がどのように推進していったらよいのか、悩んだ末に白羽の矢がたてられたのがその分野の大家である青木先生でした。

文部省時代の先生は、当時の部下の回顧によると、「実際の仕事として、戦後の教育を変えたのは青木先生です。青木先生を中心に変わりました」。内容としては、新しい六・三制教育、新しい教育課程の編成、新しい教材の編成、学習指導要領の編纂などなど。現在、私達が享受している教育体制は青木先生を筆頭とする新生文部省の活動の賜物なのです。

青木先生は3年間の文部省勤務のあと、家政学の長い伝統を持つ本学園が女子大学として脱皮する際の初代学長として招かれました。それから7年半、学生達一人ひとりにクリスマスカードを書いている最中に急逝されるまで、全身全霊で学生達の教育に邁進されたのです。

本学における先生の教育理念は、ひとことで「愛情教育」と名付けることができます。既に文部省時代に、民主主義教育の真髓が「愛情教育」にあることを洞察されていたと思われまます。

先生の「愛情教育」の考え方、そして学園における学生一人ひとりに対する「愛情教育」の実践について、ぜひ私が執筆編集した『青木誠四郎の理想とした新生日本の民主主義～東京家政大学・短大における愛情教育』で確認してください。

この本は、青木先生の「愛情教育」を実際に受けた当時の学生の皆さんからのアンケートが中核になっています。拙著の第1部は、回答された300人余の方々の回答内容の統計的な要約が主ですが、第2部には各人各様の回答がそのまま掲載されています。読めば読むほど、当時の学園生活の有り様がありありと目に浮かびます。青木先生と学生達との心温まる交流も心をうちます。

先生は水曜日に全校生を対象の講演会（水曜講演と呼ばれていた）を行っていました。学生一人ひとりの成長を願って、優しく穏やかに笑顔を浮かべながらさまざまなテーマでお話されました。愛情、友情、真の美しさ、勉学、勤勉、時間の使い方、学生の進むべき道などなど。また、民主主義社会到来による男女平等の

考えを踏まえて、母の日の特別な意義も話され、ご自分が描かれたカーネーションの絵を添えて母親に感謝の手紙を書くように勧めたり、クリスマスにはこれも先生自筆の柗の絵を添えたクリスマスカードを全学生にプレゼントしました。学生数が少なかった当時であっても学生一人ひとりに自筆のカードを作成することは並大抵のことではありません。第2部のアンケートをぜひ読まれて、先生の愛情に満ちた配慮の数々を感じとって下さい。

第3部は、先生の愛情教育の考えが既に文部省時代の公民教育や公民道徳観に芽生えていたことを説明し、本学の学長になってからは水曜講演のさまざまな機会に「愛情」とは何かについて語っていたことを指摘しています。特に昭和28年（1953年）4月の水曜講演『愛情の問題』には、先生独自の「愛情」の意義がしみじみとした口調で説かれており、その内容を私なりに詳しく解説していますので参考にしてください（拙著の545～548頁を参照）。

先生は学生達に自筆のクリスマスカードを書いているさ中に急死されました。戦後の日本の教育改革の推進者であり、また新生日本の民主主義教育とは「愛情なり！」と喝破して、学園において愛情を説き、愛情を実践し、最後に愛情を全うされた、そのような戦後の日本教育界が誇る真の教育者が本学の礎をつくられたことを忘れず、誇りをもって本学での学生生活を送っていただきたいと願っております。

（名誉教授 関根靖光）